

ON THE ROAD

久留米市立屏水中学校3学年進路通信 No. 7
2021. 6. 21 文責 保坂圭祐

命ぬちどう宝

～6月23日 沖縄慰霊の日～

戦争が終結した1945年の3月26日、沖縄本島の西にある慶良間（けらま）諸島にアメリカ軍が上陸して「沖縄戦」が始まりました。

アメリカ軍は、日本を降伏させるために日本「本土」への上陸作戦を計画し、沖縄に拠点となる基地や飛行場を確保しようと考えました。そのため、アメリカ軍は約55万人の兵力を投入し、空からの攻撃に加え、陸では銃や大砲、火炎放射器による攻撃、海からは艦砲射撃で爆弾が大嵐のように降り注いだことから「鉄の暴風」ともいわれました。一方、日本軍は、「本土」決戦を引き延ばすために沖縄を「捨て石」にし、沖縄の方言を使っただけでアメリカのスパイと見なし殺された沖縄の人々もいました。犠牲者数は、アメリカ側は12,520人、日本側は188,136人で、沖縄県民全体では、県民の4人に1人が亡くなったといわれています。（日本側の犠牲者には、アメリカ軍の攻撃だけでなく、自ら命を絶つ「自決」で亡くなった人や餓死や栄養失調、マラリアで亡くなった人、そして、沖縄から九州へ疎開する船が、アメリカ軍の攻撃により子どもを含む1,400人あまりが亡くなった対馬丸の乗船者も含まれています。）そのような中、6月23日未明、当時の沖縄防衛第32軍牛島満中将司令官と長勇中将参謀長が糸満の摩文仁（まぶに）で自決し、組織的な戦闘は終結したとされました。



なぜ、沖縄にアメリカ軍の基地があるのか？

日本は敗戦となり連合国によって占領されましたが、1952年のサンフランシスコ平和条約の発効により、主権を回復しました。しかし、沖縄は「琉球政府」が置かれたものの依然としてアメリカ領でした。（ですから、その当時、沖縄へ行くためにはパスポートが必要でした。）当時、日本国内には多くのアメリカ軍基地が存在しましたが、主権が回復したことをきっかけに、基地反対運動が起こり、アメリカ軍基地は次々とアメリカ領だった沖縄に移設されました。

1972年5月15日、沖縄返還協定の発効により、沖縄は沖縄県として「本土」復帰。しかし、アメリカ軍基地は沖縄に残り、日本国土のわずか0.6%にすぎない沖縄に、日本にあるアメリカ軍基地（施設面積）の70.4%が集中し、沖縄ではアメリカ軍基地が社会問題となっています。

宜野湾市にある普天間基地は、中央部の住宅密集地に位置し、市全体の面積の約25%を占めています。2004年には、市内の沖縄国際大学にアメリカ軍のヘリが墜落し、「世界一、危険なアメリカ軍基地」といわれています。また、普天間基地の代替施設として名護市の辺野古地区にある大浦湾の埋め立て工事が始まっていますが、この沿岸は沖縄屈指のサンゴ礁が広がり、絶滅危惧種であるアオサンゴの大規模な群集やジュゴンの生息が確認されていることもあり、新基地建設反対運動が起こっています。



なぜ、歴史を学ぶのか？

沖縄では、6月23日を沖縄慰霊の日として、平和を祈る節目の日としています。なぜ戦争に至ったのか、戦時中、沖縄の人々はどんな生活を強いられてしまったのか等、まずは事実を知ることが大切だと考えます。広島や長崎同様、沖縄でも戦争を体験された方の高齢化が進み、当時の話を聞く機会が減ってきている一方で、当事者に聞いた話を語り継いでいる若い世代もいます。これは、「同じ過ちを繰り返さない」ために、「バトン」をつなぐ活動といえるのではないのでしょうか。



古くから、沖縄（琉球）の言葉には、「かわいそう」という意味の表現はなく、その代わりに、友の苦しみに対し、それを分かち合うという意味をもつ「肝苦りさ（チムグリサ：胸が痛い）」という言葉を使うそうです。小さな島である沖縄は、すべてのものが水平線の向こうからやってき、海こそが豊かさを運んでくるものでした。そして、真っ青な海をながめながら、水平線の向こうにいろんな思いをめぐらして生活していく。そんな沖縄の人々の生活が、ものごとを“水平”に考えようとする気持ちを培い、「命どう宝（ヌチドウタカラ：命こそ宝）」という言葉に代表されるように、命を大切にする人間性から「肝苦りさ」が生まれたのではないのでしょうか。「かわいそう」というように、相手を決して上から見ずに苦しんでいる人の側に立ち、友の苦しみを少しでも自分のものにしようとしていく。また、「人に痛めつけられても眠ることはできるが、人を痛めつけたら眠ることはできない」という沖縄の人々の姿勢にも、学びたいですね。

